



何の日と夫に問はるる豆ご飯	吉田 政江
妖のひそみてをらむ夜の桜	栗原 公子
桜満つ生者は死者に追ひつけず	辻 美奈子
春送る太平洋の端を踏み	千田 百里
乳呑み児の足でよろこぶ花の昼	佐々木よし子
駘蕩やほのと木の香の輪つば飯	内山 花葉
灯台の灯の海を薙ぐ花を薙ぐ	林 昭太郎
不確かな明日へ薔薇の芽真くれなる	大沢美智子
校庭といふ春愁を誘ふもの	成宮紀代子
満開の桜の中の無重力	内山 照久
日の差して火焰のかたち牡丹の芽	能美昌二郎
夕暮の鳩かまびすし桜冷	菊地 光子
書く、語る、歌ひ始める、北開く	町山 公孝
火のやうなジャムを煮てをり三鬼の忌	兵藤 恵
水平の菜の花空の喫水線	森村 江風
草青むつまんで運ぶ稚の靴	七田 文子
蝶生れてしづかに傷む母の家	井原 美鳥
水音はぺんぺん草の睦語り	石田 静
桜まじ紐の鍵とく志野袋	平松うさぎ
山毛櫨の森神の束ねし大瀑布	くどうひろこ
激論の真ん中にある雛あられ	村上 葉子
ひと夜さの雨百穀を先づ聴かむ	米田 紀子
春惜しむ巡回バスの列につき	広海あぐり
桜守新の脚絆の七小鉤	柴田ふさこ
確かなるものに栄螺の支点かな	菊川 俊朗
眼裏の淡き熱りや花疲	金光 浩彰
地の母に預けむ種を下ろすなり	牛島 晃江
春愁のチェロ弾くチェロに耳寄せて	加賀 莊介
雪解川山のいのちの遅しく	澤田 英紀
燕飛ぶ梁黒々と通り土間	吉村 涼子

